

巻頭言

この会誌を手に行っているときは待望の「はやぶさ」の地球帰還を迎えていることでしょう。「はやぶさ」はこれまでに様々な仕事を成功裏に成し遂げ、初期の目的は十二分に達成しています。その意味で、地球への帰還はいわばおまけの様でもあり、関係者の多くの方々はある程度余裕を持って迎えることが出来たのではないかと察せられます。しかし、我々惑星物質科学を生業とする者にとっては、地球に帰還して、試料回収箱を開けてからが勝負であり、イトカワから地球に向かっている間もそうでしたが、帰還後も実物を見るまではハラハラドキドキの日々になります。

思い起こせば、我々に取ってここに至る道のりは決して短くはありませんでした。宇宙研が中心になって、回収試料の初期分析を効率的に、かつ機能的に実施する方策を模索し、全国から研究グループを公募し、コンペティションによって初期分析チームを構成するという画期的手順を整備しました。最初のコンペティションを実施に移したのが1999年で、その後2004年に追加のコンペティションを行い、現在の初期分析チームが結成されました。一方、宇宙研には回収された試料の受け入れ施設も新設され、準備万端整いました。当初の予定を大幅に遅れての帰還になりましたが、この間の遅れは、初期分析のソフト、ハードの両面でプラスの働きにつながったのではないかと思います。

惑星物質を地球に持ち帰るという画期的事業は1969年、アメリカのアポロ11号宇宙船によって実現され、1972年までの間に合計6回の探査が実施され、大量の月試料が地球に持ち帰られました。奇しくも1969年にメキシコに Allende 隕石がシャワーとなって落下し、オーストラリアには Murchison 隕石が落下しました。また、その後の南極大陸での組織的な、大量隕石試料回収につながった日本の観測隊による隕石発見も同じ1969年でした。これらの出来事がその後の世界の惑星科学を大きく牽引したことは言うまでもありません。当時、筆者はまだ高校生でしたが、アポロ宇宙線の月探査のニュースは今でも鮮明に記憶しています。その当時、多くの人が宇宙への夢をかき立てられ、私自身にとってはその体験が今に繋がっているとさえ思います。

今回のはやぶさの一連の偉業が今の若い人たちに夢と希望を与え、将来の惑星科学の発展に寄与することは間違いないと思います。この10年を見ても今世紀が宇宙探査の世紀になることは充分予感できます。数年前からははやぶさ後継機の計画が進められていますが、はやぶさ帰還をバネに、是非ともはやぶさ後継機の打ち上げを実現させましょう。

海老原 充(首都大学東京大学院理工学研究科)